

明大校歌歌詞の成立 補論

- 西條八十補作の裏付け資料 -

飯澤 文夫^E

1 明大精神の原風景

三十一年にメルボルン・オリンピック日本代表となり、明治記念講堂の壇上にて、送別の校歌を聞いた時は、日本のため、母校明治のために死ぬつもりで頑張らなくては、と心に誓った思いが熱くよみがえるのです。白雲なびく駿河台！ おお明治！ その名ぞ我等が母校！ 現役、現在問わず、スランプに落ち込んだ時、何度心につぶやいた事でしょうか。（「名誉と誇りをもって後進指導、空腹に耐えボクシングに精進」）

これは、元・プロボクサーの米倉健司氏¹が、『明治大学校友100年の歩み - 校友規則制定100年記念』収録の回想集「現代を生きる50氏の回顧録 私の明治」に寄せた小文²の一部である。米倉氏は、昭和32年の経営学部卒業生で、在学中に全日本アマ・フライ級チャンピオンとなり、メルボルンオリンピックに出場して準決勝まで進み、プロに転向して東洋バンタム級チャンピオンに輝き4度の防衛を果たした。引退後はヨネクラジムを興して柴田国明やガッツ石松、大橋秀行らの世界チャンピオンを育て、また全日本ボクシング協会会長などもつとめるなど、わが国ボクシング界

^Eいざわ・ふみお / 図書館庶務課

¹よねくら・けんじ、昭9～

²明治大学校友会校友規則制定100年記念事業委員会「明治大学校友100年の歩み」編集・出版委員会発行、昭61・5、p.133

の中心人物として活躍している。50名の校友によるこの回顧録で、米倉氏を含め10名ほどが、何らかのかたちで校歌に事寄せて母校に思いを馳せているのは印象的である。

「校歌」の語義を国語事典に求めると、「その学校の理想、特長、精神などをもり込んで作詞、作曲され」³「校風を発揚するために制定」⁴されたものとある。島崎藤村は己の故郷を、血につながり心につながると詠ったが、まさに、「白雲なびく」は大正9年の成立以来、明大生にとって故郷の如く、血となり肉となって、即ち原風景として記憶されてきているものといっても過言ではあるまい。

2 西條八十が語る校歌歌詞成立の経緯

さて、本誌創刊号⁵に発表した拙稿「明大校歌歌詞の成立 - 西條八十の自筆原稿を追って -」(以下「前稿」)において、児玉花外の自筆稿として



若き日の西條八十(左)⁶と児玉花外(右)⁷

³ 日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典 第4巻』(小学館、昭55.4)

⁴ 金田一京助編『新明解国語辞典 第4版』(三省堂、1989.11)

⁵ 1997年3月刊

⁶ 写真は西條八束氏蔵、同氏の了解を得て、国書刊行会から提供を受けた。

⁷ 花外の肖像は武田孟蔵、武田洋平氏及び昭和女子大学近代文学研究室の了解を得て、同室編『近代文学研究叢書 第52巻』(昭和女子大学近代文学研究所、昭和56.5.31)より転載。

本学図書館が入手した校歌原稿が、実際には西條八十の手になるものであったことから、花外原詞が八十の推敲を経て今日の歌詞に成立する過程と、補作者としての八十の位置づけを明らかにした。しかし、その際に八十側に文献的裏付けがなく、刊行途上にある『西條八十全集』(国書刊行会)(以下『全集』)の編集過程での新発見に期待をつなげるしかないと思わざるを得なかった。

ところが、まさに天恵というべきか、平成8年11月に、『全集』第10巻「歌謡・民謡／社歌・校歌3」[1-35]が刊行され、希求の資料を発見することができたのである。同巻には当然のことながら本校校歌は収録されていないが、巻末の解題・解説で森一也氏⁸が、八十から作詞の秘話を聞いていることを記していた。それは次のようなものであった。

ある夜、八十が校歌について語っていた時、筆者が明治大学の校歌を賞賛すると、八十は「あの校歌は僕が書いたんだよ」と言い、自作を児玉花外の名で発表した内幕を聞かせてくれた(この件については晩年の随想でも触れられている)。…(中略)…児玉の没後もこの裏話は口外しなかった。ところがその後、ある作曲家がマスコミ関係者に「あの歌詞は僕が書いた」と公言した事を耳にし、真の作者が沈黙を守っていると事実を曲げられてしまうからと言って筆者だけに知らせてくれたのである。

きわめて重要で、また意味深長な証言である。それと共に、「晩年の随筆で触れられている」との記述には少なからぬ衝撃を受けた。前稿執筆の際に、八十の自伝と随筆については、悉皆とはいえぬまでも、かなりの程度は当たつつもりでいたからである。そこで、『全集』の発行元である国書刊行会に照会し、編集担当の出野哲哉氏から名古屋市に在住する森氏を紹介していただいた。森氏は現在、日本コロムビアレコード⁹の専属作曲家であるが、昭和7年4月に愛知県の一宮中学校から本学付属の明治中学

⁸もり・いちや、大4～

⁹前稿補注で「日本コロムビアレコード」と表記したのは誤り。本学農学部の中田佩刀教授からご指摘をいただいた。

校第4学年B学級¹⁰に編入し、翌8年4月に家事都合で退学したが、この間、明大講堂でもたれた山田耕筰の音楽講座に出席したこともあるとのことで、思わぬ奇遇に驚かされた。

森氏は、長期療養が必要な病気でまもなく入院を控えているという身をおして、長時間の電話取材に懇切に対応してくれた。八十との関係については、幼少の頃から八十の童話に親しみ、毎晩母親から読み聞かせてもらわなければ寝られぬほどのファンであったが、長じて幸運にも仕事を通じて知り合うところとなり、以後、八十が亡くなるまで厚誼をえることができたと話された。この森氏のことを八十は、小説風な回想記である『女妖記』に収録された「令子という女」¹¹の中で、「名古屋に森一也君という、作曲をやったり、NHKの音楽解説をやったりする才人がある。おまけにこの人はぼくの書いた物なら、詩であれ、歌であれ、散文であれ、なんでも辞引のように知っている」と紹介している。

明大校歌の裏話は、八十夫人が亡くなって暫くした頃に聞かされたとのことで、『全集』の解説に書いた「晩年の随筆」とは、『我が歌と愛の記』[1-30]であるといわれた。八十が「純情で、貞淑で、ほうらつ無慚の良人を、慈母のごとく守り育ててくれた典型的な日本妻だった」¹²と、愛おしんだ晴子夫人を亡くしたのは昭和35年の初夏、折しも44年目の結婚記念日にあたる6月1日のことである。

ところで、昭和52年に白鳳社から刊行された『我が歌と愛の記』は、本学図書館には所蔵されておらず、古書店の目録で探したところ、偶然にも八十の自筆草稿を購入したY書店の目録に登載されていた。ここで入手できれば起承転結ということになるのだが残念ながら売り切れであった。しかし数日後、幸いにも同じ神田のN書店の店頭で見つけることができた。当該書は、昭和36年4月から7月まで「西日本新聞」に100回にわたって連載された随筆をまとめたもので、37年9月に同じ白鳳社から『我愛の記』[1-30]と題して出版されたものの改題・再版本であった。新聞では、夫人の追憶から書き出したため、「孤独の窓」と連載タイトルがつけられたが、一冊にするにあたって、別離、風景、哀歌、孤独の4章だてに再編された。

¹⁰ 当時は第5学年まで

¹¹ 中央公論社、昭35.2刊、p.37

¹² 「老妻の死」、『我が歌と愛の記』、p.12-13

明大校歌については、目次で当たったが見つめることはできず、訝しく思いながら読み進める内に、第2章「風景」の「上海の珍客」[1-30]と題した一節に、まさに唐突に出現した。八十の文献を調査した際に、「西日本新聞」の連載も承知していたのだが、まさかかかるタイトルで触れられているとは思ってもよらぬことであった。

「上海の珍客」は、昭和13年に陸軍の要請で音楽隊の隊長として中支戦線に従軍した八十が、上海のホテルで思いがけず山田耕筰と画家の藤田嗣治に行き会うところから始まる。そこでの耕筰の思い出を書くうちに、「そう、そう、そう言えば、ぼくがいままで筆にしなかった事実を初めてここで公開しよう。もう時期も経っているからいいだろう。それはぼくが若い時に、いまさかんに唱われている『明治大学の校歌』を書いたことだ。」と、秘話を披露する。長い引用になるが、重要な記述なので全文を紹介する。

この校歌の作者は詩人児玉花外となっている。花外は詩集『天風魔帆』¹³や発禁の『社会主義詩集』¹⁴などの著者として、少年時代ぼくが熱愛した優れた詩人だ。

ところで、当時の明治大学の学生たちは、初めこの人にあの校歌の制作を頼んだ。ところが歌は出来たには出来たが、非常に奔放自在な自由詩だった。それで作曲に当たった山田さんは困って三人の学生委員に紹介状を持たせ、その歌詞をぼくのところへ持ち込んだ。作曲の出来るような調子のいい定型詩に書き改めてくれとのことだった。ぼくはこの先輩の詩人に対し非礼だとは思ったが、急を要するままこわれる通り、全体を勝手に書き直し、出来上がったのがいまの校歌である。そのころ花外は酒に耽り、押川春浪編集の冒険雑誌「武侠世界」などに散文的な自由詩を書き散らし、もう往年のように格調の整った詩は書けなくなっていたのだ。

花外が晩年、落魄して病床にあったとき、明大の学生連は花や金品を贈ってこの校歌の作者を慰めたという美談があった。

¹³ 平民書房, 明40.1

¹⁴ 社会主義図書部, 明36.8

そんな関係上、ぼくはほとんどこの事実を今日まで発表しなかった。

十数年前、たまたま山田さんと懐旧談をして、「あのときぼくのところを訪ねた学生たちはどうなっているのでしょうか」ときくと、山田さんは、「もうみんな立派な会社の重役になっていますよ。あの人たちやわたしなどが死んだら、もうこの事実を知るひとは無くなるでしょうよ」と言われた。

ぼくがいまこの序にこの事実を公開したのは、輓近この校歌の作者と名乗る別の人が現れたと、ある新聞記者から聞いたからである。もちろんこの歌の補作で、ぼくは一文の報酬も受けなかった。そして、いまでも、ぼくは自分の筆がいささかでも先輩の老詩人の労作を助けたこと、またぼくが心を砕いた二、三の詩句が大勢の若い学生たちによって唱われていることをひそかに喜んでいるのである。

晴子夫人が亡くなったのが昭和35年の6月1日で、「西日本新聞」への発表が翌年の5月29日であるから、森氏のいわれる「八十夫人が亡くなられて暫くの頃」とは、この1年ばかりの間を指すのだろう。

八十は明大校歌補作の秘話を、最期まで胸に納めたままにしておくつもりでいたに違いない。事実、この後も、「上海の夜」以外に明大校歌に言及した文章は見当たらない。ところがそれを破って公表せずにいらなかったのは、事実を歪められることへの義憤であった。八十のいう「別な人」の言動については、私自身がその事実を把握していないこともあり、あえてここでは追求しないことにする。それにしても、落魄の先輩詩人を思いやる八十の態度は清清しく爽快である。

前稿では、八十自筆原稿の出現から多くの推測も加えて、八十の果たした役割を追求したが、この八十自らの証言により、関与の度合いが、これまでいわれてきたような、手を煩わせた、あるいは、作曲しやすいように手直しを求めたといった程度のことでなく、むしろ実作者とよぶことの方がふさわしいものであったことを、ここに改めて確認しておきたい。

3 八十と河井醉茗の花外に寄せる友情

本稿の準備をしている折り、作家の横田順彌氏が、「児玉花外と」・ロンドン¹⁵という小エッセイで、「明治大学校歌は別人により、大幅に手が加えられているそうだが、それについては、ここで触れない」と書かれているのを目にし、押っ取り刀で同氏に教示を求めたところ、早速に、昭和42年に刊行された島本久恵の『明治詩人伝』¹⁶であるとの回答をいただいた。同書は、明治から昭和にかけて活躍した新体詩の代表的詩人河井醉茗の夫人で、自らも小説家であった島本が、醉茗と親交の深かった伊良子清白ら10名余りの詩人の軌跡を、醉茗からの聞き書きをもとにまとめたものである。花外もその1人に加えられ、醉茗を通じた優しい眼差しが向けられている¹⁷。

花外は昭和11年以来、救護法の適用を受けて、東京板橋の養老院¹⁸で寂しい日々を送っていた。その花外を慰めようと、日本文学報国会の詩部会が、花外の詩集編集を醉茗に依頼した。「詩人集団」の依頼は、大正昭和期だけの作品を取り上げようとするものであった。花外を純真な詩人として評価していた醉茗は、これに異議を唱えた。醉茗の異議は、大正昭和期だけを取り上げるのは、花外の詩の安易を現代の若者に提示することになり、好ましくない暗示となることを深く憂う、というものであった。そのため「担当責任者であった某氏」が、わざわざ醉茗を訪ねて懇談した。

(醉茗の) 苦衷を明かされた某氏、もちろん一方の大家であるその方に通じない筈もないものであった。氏もまた大正期に入ってから花外の詩の粗大を嘆いて、世間には固く秘されていた明治大学校歌「白雲なびく」の作詞当時の事情をはじめめて洩らされ、醉茗も他にはついに伝えなかったが、かくれた某氏の、老瘦あまりに早かった花外に注いだ友情には、おなじ嘆きでの同感をば長く刻んで、吐息と共にそれとなく花外の

¹⁵ 「ちくま」319, 平9.10.1, p.1, 「旧聞異聞31」

¹⁶ 筑摩書房, 昭42.12.10

¹⁷ p.255-309, 「三木天遊と児玉花外 - 詩に生きる装備」

¹⁸ 東京市立養育院

最後の無事をば念じた¹⁹。

この結果、酔茗の意が汲まれ、第一部明治篇、第二部大正昭和篇の二部構成となり、酔茗の緒言が付され、『児玉花外詩集』²⁰として刊行された。大正昭和篇には、「明治大学校歌」も収録された。

代表作「馬上哀吟」を含む50年に及ぶ詩作が集成されたこの詩集を手にして、花外の感慨は如何なるものであつただろうか。それからわずか2ヵ月後の9月20日、新詩集を手みやげに花外は黄泉の国へと旅立ったのである。10月9日に板橋の宗仙寺で営まれた友人葬では、酔茗が弔辞を捧げている。

島本の表現は何か憚ることでもあるのか、全体に婉曲的で難解である。先に「担当責任者であった某氏」と書かれた人物が気になるところであるが、後段に「西条」と記した箇所があった。

(酔茗の日記の花外死去を記した)おなじ年の春のところには二月二十三日「西条氏を訪ひ『児玉花外詩集』の原稿を手交す、一二月後に出版さる」と。すなわち問題を持って一度は担当のその方と談合もしたその詩集である²¹。

当時八十は、日本文学報国会の詩部会幹事を務めており、「某氏」が八十であることは疑いがないものと思われる。

前述のとおり八十は、昭和36年に発表した「上海の珍客」で、明大校歌補作の事実は初めて公開することであり、今まで筆にしなかつたと書いているが、それよりも20年も前の昭和18年に、花外の詩集編集を巡る難しい局面の中で、花外と因縁浅からぬ酔茗にだけには洩らしていたのである。酔茗が亡くなったのは40年で、享年90歳であつた。固く口を閉ざしていた酔茗が、妻島本久恵に打ち明けたのはいつのことであつたろうか。八十が酔茗に語らずにはいられなかつた心境と合わせ興味深いことである。

前稿と本稿により、歌詞成立における西條八十の関与の実相と経緯は概ね明らかにできたかと思う。八十の自筆原稿出現は定説を覆す歴史的事件

¹⁹ 同上書, p.280

²⁰ 日本文学報国会編, 文松堂書店, 昭18.7.31

²¹ 同上書, p.303

のように感じられた。しかし、調査を進めるうちに、少なくとも昭和6年には花外原詞と八十に補作を依頼したことが公刊物に掲載され、戦後には八十が自らそれを書いているなど、八十による大幅な改作の事実は早い時点から明らかにされていたことが判明し、いささか拍子抜けし、また、なぜそれが公的に認知されてこなかったのか奇異にも感じられた。だが、多くの文献に触れ、状況が理解できるようになってきた今はむしろ、花外の意気と八十の思いやり、それをよしとした武田や牛尾の心情がひしと伝わってきて、胸に熱いものが湧いてくる。

本稿に関係者の肖像を収録しようと多くの方々に協力を依頼した。武田孟のご子息である洋平氏（東海大学助教授）とも連絡がとれ、いくつかの貴重なエピソードを伺うことができた。その一つに、花外を語る父孟の口調には寺の子として育ったことからくる深い人間愛のようなものが感じられたこと、また、明大創立70周年の頃、90余歳の老体を押して大学を訪ね、校歌制定のいきさつを正しく記録しておくよう申し入れていたことなどがある。そして、私に対しても、充分なるドキュメント（資料的裏付け）に基づいて真実を追求するよう、あたたかいアドバイスを頂いた。

本稿は、前稿に引き続き西條八十の存在を確認することであり、その他については若干触れたに過ぎない。明大校歌は特異な成立過程を経ており、その面でまだまだ調査し解明されなければならないことは沢山ある。

創立120周年という節目を迎え、校舎の面目も一新して次代を拓こうとするこの時にこそ、明大の精神風景を育んできたものに、正しい歴史認識の眼差しを向けたいと考えるのである。

4 もう1人の学生委員越智七五三吉のことなど

校歌の制定に商学部の3人の学生が制定委員として奔走したことは、多くの文献で述べられていることである。

ところが、武田孟と牛尾哲造の功績は言及されても、もう1人の人物である越智七五三吉（おち・しめきち）のことは、ほとんど語られることがなかった。



卒業を目の前にした武田孟(左)と牛尾哲造(右)²²

事実、越智を知る手がかりは少ない。私を知る限り、越智自身が卒業後15年を経た昭和13年に「明治大学商科同窓会誌」に執筆したエッセイ一点と、武田の回想²³、及び本学校友課が管理する手書きの卒業生カードが残されているだけである。

「校歌を語る」[1-28]と題されたこのエッセイは、「校歌が如何に当時の学生の火焰の如き愛好精神によって胎生し育成したかを知って貰いたい」との思いから、京橋の越智の事務所²⁴に牛尾、武田が相会してなったものだという。冒頭に、「数万の校友諸君よ 幾千の学生、生徒諸君よ 感激のもと母校を謳ふとき 須らくその歴史的な生命を知れ」との惹句を置いて始まる。

それによると、大正7、8年頃の明治大学は、講座内容、施設、財政様々な面で、およそ大学らしからぬ「荒寥とした雑然混迷」の沈滞した雰囲気にあった。越智らの大学を憂う学生たちは、これを打破するため大学再建運動に立ち上がり、激しい騒動になった。運動の中身については割愛するが、大学令による大学昇格の混乱期に起こった、いわゆる「植原・笹川

²² 『大正拾二年度卒業記念』(明治大学商学部, 大12.4.5)より転載。歴史編纂事務室提供。

²³ 校歌「白雲なびく」物語(2) (『週刊明治大学新聞』936, 昭37.5.17, p.2)

²⁴ 当時越智が勤務していた東京モスリン紡績会社と思われる。

事件」とその一連の騒動に越智も加わっていたものと推測される。校歌は「この旺然たる明治大学再建運動への白熱的学生の精気」の中で「学生の愛校心の塊」として生まれた。「げに本学の校歌こそは、明治大学の時代的転換期の混迷裡に、学生の革新精神によって培はれ、空前絶後 時の中橋文相が議会の質問に立ち往生した程の猛烈な学生の当局排斥騒動の直前に胎動し生誕し、血の凱歌となって登場した」もので、「純真にして強固なる学生の団結はこの校歌を生み、而して校歌は更にその団結を昂揚して今日の大学を招来したのである。 栄光あれ明治大学の校歌よ!! 」と、激越な口調で前段を結び、その後以下の三つのエピソードを紹介する。

その一は、大正8年の大学レガッタで惨敗したことによる学生憤懣が、大学自体の無気力に起因するとして、大学の改革運動にまで発展したこと。応援の意気をあげるために校歌制定が提案されたことは前稿でも書いたとおりである。その二は、校歌制定に消極的な木下友三郎学長や田島義方学監とのやりとりと、武田、牛尾の交渉力。その三は、武田と共に作詞が進まずに悩む花外と江戸川縁をそぞろ歩いた折り、花外が胸に浮かぶ歌詞の一句一句を口ずさんで聞かせてくれたこと、また泥酔して正体をなくしても、片時も校歌が頭から去らなかった様子などである。

そして最後に、「老酔詩人花外よ、生命を打ちこんだ明治大学校歌のみは、幾千百の詩が忘れらるとも、永遠に青春の学生の胸底に生きてゆくであろう。」と、限りない敬愛の情を寄せるのである。

なお、これらの騒動については、『明治大学百年史 第3巻 通史編1』の「第2章 明治大学と大正デモクラシー」²⁵に詳しい。そこには、騒動で放校処分された学生の中に商科関係者が1人もいないことが注目されるとし、「後年学長や総長として大学行政に大きく貢献するようになる武田孟は当時商科の学生であって、事件の直前に制定された大学校歌の成立には尽力したが、この事件との関わりは薄かった」ようであり、騒動の渦中であって商学部学生は「穏健派」であったと記されている。前掲文の調子からすれば、越智は処分されるほどの行動派でなかったとしても、相当のシンパサイザーであったような印象を受ける。その越智の人となりを武田は、「熱血漢で面白い男であったが、惜しいことに終戦後まもなくして

²⁵ 明治大学, 平4.10.15, p.737~803

脳いっ血で急逝した。」と回想している。

越智の履歴は、卒業生カードに、北海道小樽市出身、大正12年3月に旧制商科を卒業、東京モスリン紡績会社員、北洋木材輸出業、日本毛糸元売統制組合常務理事、昭和27年8月15日死亡、住所は小樽市にはじまり、札幌市、東京市赤坂区、中野区、世田谷区経堂町とあるのが全てである。記述の仕方から世田谷区経堂町が最終居住地と判断されたため、世田谷区の電話帳により、当該地に越智姓を当たってみたが、いずれも無関係とのことであった。

越智についてはこの程度のことしか調べ得ていないが、武田、牛尾と共に、校歌制定の功労者として正しく位置づけられるべきである。

最後に、前稿で山田耕作の伝記『この道』の中に、神田駿河台下の老舗砂糖卸商の稲垣伝次郎氏の話として、校歌作詞料についての証言があることを書いたが、その後日談を記しておきたい。

稲垣伝次郎は、『明治大学校友会名簿』²⁶や校友課で調べたところ、旧姓を常磐英雄といい、大正13年商学部卒で、老舗とは目と鼻の先の神田小川町で現在も営業する株式会社稲垣商店²⁷であることが分かった。早速面会を申し込んだが、すでに昭和62年に死去されていた。それから数日後、伝次郎と名乗る方が私の職場を訪ねて来られた。それはご長男であった。常磐英雄は稲垣家に入り婿して3代目伝次郎を継承（以下混乱を避けるため常磐と記す）、ご長男は4代目とのことであった。

常磐は佐々木吉郎や森永太平²⁸と同級生で、広告研究会と応援団に属していた。記念館の復興には率先して参加し、「明治大学復興歌」を高唱しながらもっこを担いだ。母校愛は並々ならず、正月などには社員を集めて、校歌や復興歌を大合唱するのを常としたという。その影響で、明大卒ではないご長男も、いずれもそらんじていると云われ、復興歌を私の前で口ずさんでみせてくれた。ただ、作詞料については、『この道』で語った以上のことは聞いていないとのことであった。こうした校友があったことも忘れてはなるまい。

²⁶ 明治大学校友会本部, 昭34.3.25

²⁷ 砂糖・糖化製品・小麦粉・鶏卵その他食品原料卸

²⁸ 常磐は明大卒業後暫く「森永」に勤務した

本校を執筆するに当たって今回も多くの方々の協力をいただきました。記して感謝の印とする次第です。

前述の横田順彌氏と武田洋平氏。貴重な写真を提供していただいた西條八束氏、本稿には使用しませんでした。牛尾哲造長男故宣夫氏の夫人牛尾菊恵氏には、牛尾哲造の在学当時の写真の提供を受けました。歴史資料として大切に保管し、今後活用させていただきたいと考えています。稲垣伝次郎（4代目）氏、昭和女子大学近代文学研究室、出野哲哉氏（元国書刊行会）、梶浦慶子氏（国書刊行会）、玉木久雄氏（図書館整理課長）、今井昌雄氏（同庶務課）、鈴木秀幸氏（歴史編纂事務室）、校友課及び高等学校・中学校事務室の方々。終わりに、前稿発表に当たっては戸沢学長に様々なご配慮をいただきましたことを厚く御礼申し上げます。

明治大学校歌関係文献目録 追補（文献番号は前稿からの通し番号）

1. 校歌関係

26. 校歌の由来（「明治大学商科同窓会誌」1, 昭8.12.5, p.119 明治大学商学部編・刊『七十年の歩み—史料編 第3集』, 昭53.3.31, p.205-206 に再録）
 - è 児玉花外原詞を紹介するが、八十には触れていない。
『七十年の歩み—史料編 第3集』に出典を「商科同窓会誌昭和十八年九月二十五日」としている。この日付は同誌第10号に合致するが、同号には該当記事がない。内容は創刊号掲載記事と全く一致しており、この誤りかと思われる。
27. 佐々木吉郎. 私の学生時代（「明治大学商科同窓会誌」3, 昭9.12.5, p.70-73.）
 - è 制定初期にもった校歌の性質を「認められざる校歌の反逆性」として、当時の校歌にまつわるエピソード等を紹介。
28. 越智七五三吉. 校歌を語る（「明治大学商科同窓会誌」5, 昭13.12.18, p.82-88）
 - è 当時の学校騒動が「校歌胎動の精神運動の胎生」となったこと、制定および作曲・作詞料に関する学監との交渉、八十への補作の依頼、牛尾の奔走、武田と訪ねた折りの花外とのやりとりと印象など。
29. 牛尾哲造. 校歌をつくったころ（「季刊明治」5, 明治大学企画課, 昭35.10.15, p.17-18）
30. 西条八十. 上海の珍客（孤独の窓 45）. 「西日本新聞」夕刊, 昭36.5.29, 第2面）
『我愛の記』（白鳳社, 昭37.9.1, 2. 風景, p.98-100）に再録、改題・再刊、『わが歌と愛の記』（白鳳社, 昭52.10.25, 2. 風景, p.98-100）
31. 武田孟. 学生の手で生まれたわが校歌.（「季刊明治」9, 明治大学広報課, 昭37.6.30, p.32）
 - è p.33に「明治大学校歌作曲者と……」として武田孟、山田耕筰、牛尾哲造の集合写真を掲載。
32. 武田孟. 忘れ給うな我が校歌 - 校歌制定の由来について - .（「明治大鑑編集委員会編『明治大学大鑑'65 創立八十五周年記念』（明治大学新聞学会, 昭40.4.8, p.64）明大校歌歌詞の成立 追補
33. 校歌の制定.（藤田剛志、江藤武人編著『大学の歴史と人 = 明治大学編（人脈シリーズ）』, 学友会センター, 昭61.5.25, p.127-130）

○ 花外の了解のもと、耕筰の紹介で八十により作曲されやすい形に手直しされたとし、『商学部七十年史』収録の「校歌の由来」抜粋（底本は「商科同窓会誌」（昭18.9.25）であるが、内容は1-26に同じ）とともに、「児玉花外の原歌詞」と「西条八十修正歌詞（現在の校歌）を併記。

34. 加藤隆. 校歌余録（大学史余滴 5）（「明治大学学園だより」153, 昭61.10.15, p.4）
35. 森一也. [『西條八十全集 第十巻 歌謡・民謡3 / 社歌・校歌』] 解題・解説（国書刊行会, 平8.11.25, p.374-375）
36. 飯澤文夫. 明大校歌歌詞の成立－西条八十の自筆原稿を追って（「図書の譜－明治大学図書館紀要」創刊号, 平9.3.18, p.33-56）
37. 飯澤文夫. 西條八十補作の自筆原稿を入手 明大校歌の歌詞成立過程明らかに 明大図書館（「明治大学広報」416, 平9.5.1, p.1）
38. 後藤総一郎. 新「校歌」物語（大学史の散歩道 8）（「明治大学学園だより」260, 平9.5.15, p.8）

< 追悼 森一也氏 >

森一也氏が2月1日に呼吸不全のため亡くなられた。享年82歳であった。

西條八十補作の裏づけ資料を提供してくださったのは森氏であり、同氏無くして本稿は成立しない。同氏からは昨年暮れ以来、八十との関わりや校歌資料について何通もの葉書をいただいている。病床の震える手で書かれたその葉書には、いつも本学を懐かしみ、そして何より真実を明かしてほしいとの願いが切々と綴られており、受け取る度に心抉られる思いであった。本稿を捨て石として、大学に一日も早く八十補作を認知してもらうべく、働きかけていきたいと考えていただけに、その実現はもとより、本稿すらお目につけられなかったのは痛恨の極みである。

いまはただ、ご冥福を祈るばかりである。